

第27回「東書教育賞」の審査を終えて



審査委員長

寺崎昌男先生

今回の審査にあたりまして、東京教育研究所の先生方の長時間にわたる第1次審査、そして我々審査員の審査を経まして、本日ここにその結果をご報告できますことに感謝いたします。そして何よりも、論文をご応募され、今日表彰される先生方のご努力に、厚い感謝と敬意を表したいと思います。

今回、入賞された先生方の論文内容をご紹介します。

まず小学校・最優秀賞を受賞されたのは、茨城県鹿嶋市立高松中学校にいらっしゃる関根幸枝先生の論文です。関根先生は現在、中学校にいらっしゃいますが、前任の小学校6年間の実践を論文にまとめてご報告になりました。題名は「健康は一生の財産！たくましい子どもを育てた健康教育の実践」です。

先生の実践の基本は、「気づき」、「考え」、「生かせる」という3つのキーワードで表されています。6年間の実践を積み重ねて、一人ひとりが自分の心や体を知って大切にできるようにしたいという願いをもって実践しておられます。6年間の健康教育が、子どもたちの発達段階に応じて系統的かつ構造的に構成されていることが、この実践の特徴です。教育活動の展開が適切に記述されており、優れた論文になっています。

関根先生は、論文の中で次のように書かれています。対象とされたのは11人の子どもたちで

すが、「11人の子どもたちとの6年間は試行錯誤の連続だった。何度も立ち止まって悩んだ。そんな時、私の考えに賛成し、助けてくれる仲間がいた。ともに子どもたちの成長を願い、協力してくれた保護者がいた。」このように書いておられます。ご自分一人だけではなく、同僚および保護者との協力の下に子どもたちの健康を伸ばすという実践をなさったことを、私どもは高く評価させていただきました。

なお、関根先生は第22回で優秀賞を受賞していらっしゃいます。

小学校・優秀賞を受賞されたのは、宮崎県延岡市立延岡小学校の宇都宮浩先生の論文です。テーマは「実感を伴った理解を深めるための理科指導の在り方」です。この論文は4年生から6年生の理科を中心とした実践です。具体的な体系に基づいて、問題解決的学習、ノートの指導、メディアの活動、保護者との連携、などを伴った理科の理解を深めるための実践をまとめておられます。特にノート指導とサイエンスニュースの作成、理科読書といった教科外の活動と連動させた展開は、実に見事なものでした。実践後のアンケートでも8割以上の子どもたちが、「身についた」、「わかった」と答えていて、こうした点が高く評価されました。

もうお一人の優秀賞は北海道札幌市立白楊小学校の黒澤智美先生の論文です。先生の論文は「自ら問題意識をもち、意欲的に学び合う子ど

もを育てる学習を目指して」です。第5学年の小数のかけ算、わり算、6学年の分数のかけ算、わり算、比の学習における2か年にわたる授業と学級経営の実践をまとめられています。「クラスみんなで学び合う算数は楽しい。だから算数が大好き」という気持ちを育む指導を行っておられます。ネームカードの活用や間違いを学びのエネルギーに転換させるといった、いくつかの実践のポイントによって指導された素晴らしい実践論文だと思います。

次の優秀賞は、秋田県秋田市立川尻小学校の田口隆校長先生の論文です。これは後ほど、坂元先生から講評があると思いますが、「ICT活用を基盤に据えて進める栽培活動及び理科授業の創造」というテーマです。ICTをマニュアル、記録、発信の道具として活用した結果、次の課題も子どもたち自身が見つけていくという探求活動ができるという点が高く評価されました。

最後に、今年も特別賞を設定させていただきました。茨城県日立市教育研究所所長・大地育先生の論文です。大地先生は第23回に最優秀賞を受賞され、第26回に特別賞を受賞していらっしゃいます。先生がお勤めになられる日立市教育研究所は、平成22年1月に「こども発達相談センター」を開設されました。実際に相談事業をスタートさせておられますが、多くの親が求めているのは、相談よりも手厚い支援だということに気づかれます。先生は専門スタッフによる先行研究を行いながら、1年間研究された後で、発達障害児の理解と支援に必要な支援メソッドというものを開発されました。先生の研究は、組織性のある画期的なもので、優れた教育実践でした。

次に中学校に移ります。中学校・最優秀賞を受賞されましたのは、岡山大学教育学部附属中学校の小山真二先生の論文です。テーマは「技術・家庭科（技術）における問題解決能力の育成を目指した授業」です。これはストローで橋を作るという課題を子どもに与えた授業実践で

す。

小山先生は、富士ゼロックス株式会社の新入社員研修を見学されて、そこでヒントを得られて子どもたちがストローで橋を組み立てていくという授業を進めていきます。その中で子どもたちは実に2回の競技会というものを開いて、お互いの技術の進歩を競っています。子どもたち自らが長所を持続させ、短所を改善することを通じて、問題解決の基本的な考え方を身につけていったことを先生は高く評価され、我々にもそれがよく伝わってきました。

先生が紹介している感想文の中で、ある子どもは、「少しの改善で性能が飛躍的に上がり、正直、私は驚いた。今後は身のまわりのことも実践して生活を良くしていきたい」と書いています。一つ一つの問題を解決していくことを通して、自分の力を確かめ、生活にそれを生かしていくという意欲を持ったこと、しかも、それが受験を控えた3年生の子どもたちであることも、大変印象に残りました。

中学校・優秀賞を受賞されたのは、長野県長野市立柳町中学校の新井仁先生の論文です。「数学における表現力の育成を目指した問題解決学習のあり方」というテーマで、生徒の表現力を育てるための問題解決学習のあり方を検討することを主眼にした論文です。新井先生は昨年「統計資料を取り入れた数学的モデリングの教材開発」というテーマで優秀賞を受賞されていますが、それをさらに発展させた数学的モデルを活用した優れた実践でした。

新井先生は、第22回では奨励賞を受賞していらっしゃいます。

次の優秀賞は千葉県南房総市立丸山中学校の小松香江先生の論文です。テーマは「自己表現活動に意欲的にとりくむ生徒の育成～『英語で日記を書くこと』を通して～」です。論文は題名の通り、子どもたちが英語で日記を書くことによって、自己表現活動に意欲的にとりくむ生徒を育てたいと目指されたものです。授業で学習した自己表現文を英語の日記で使うことがい

かに有効なものであるかがまとめられています。さらにまた、ピングやリバースピング、あるいは英語日記という遊びと実用を兼ねたいろいろな工夫によって英語を生きたものとして子どもたちが使えるように努力していらっしゃいます。

中学校の特別賞は、熊本県玉名市立有明中学校の井上裕一先生の論文です。

井上先生は、学校のグラウンドの一部になっている旧日本軍の大浜飛行場を題材に、残されている文献から飛行場を造ったプロセス、当時の住民感情、空襲による被害というものについて学習活動を実践していらっしゃいます。身近なところで子どもたちの経験に即した地域教材を発掘し、それを実践に生かしていく中で子どもたちがテーマに迫っていくという実践は大変印象的でした。

井上先生は実に第19回、24回、25回で優秀賞を受賞され、第26回では最優秀賞を受賞していらっしゃいます。

最後に、私から三つほど申し上げたいと思います。今年度は、東日本大震災の影響で東北地区からの応募が多くありませんでした。改めて調べてもらいましたところ、一昨年度の第25回は東北地区から27編寄せられています。昨年度、第26回は26編の応募がありました。しかし今年度、第27回は15編に減りました。これは相当な減り方です。これは想像するに明らかなことですが、とても東北地区の先生方には実践記録をまとめていくというような時間が足りなかったのではないかと思います。しかし来年度に向けて、防災教育を含めた様々な生き生きとした実践論文のご応募をお待ちしたいと思います。

2番目は、毎回申し上げていますが、先生方

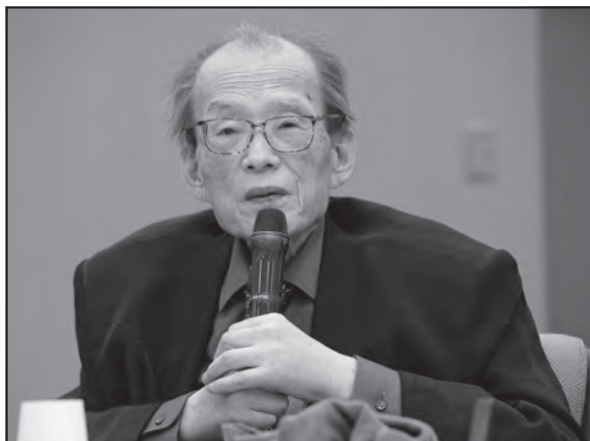
が実践を書くという文化です。教育実践をする、授業をするというのは、世界的にどの国の教師もやっていることですが、実践したものを書くという行動は、まさに日本の教育文化の一つです。そして、それは日本独自のものではないかと思われま。戦前から、日本の先生方にとって教育実践記録を書くことは当たり前に近いことになっています。

私は教育の歴史を専攻していますが、日本では明治30年代はじめ、つまり20世紀に入ったころから、たくさんの教育雑誌が登場しています。その読者はすべて、学校の先生です。そしてそのほとんどが小学校の先生です。その教育雑誌の中身を支えたのは何かと言うと、先生方の投稿です。投稿の中身は何かと言うと授業記録なのです。こうした教育文化は今後も継承されていくべきものだと思います。

3番目に、いま求められているものは何かと言いますと、アメリカのドナルド・ショーンという学者の言葉を借りて申しますと、反省的実践 (reflective practice) と言われるものです。先生方は自分の実践を反省する、あるいは省察を加える、省察を加えることを通して、本当のプロフェッションに育っていくという考え方です。プロフェッションが形成されていくプロセスというのは、reflective practiceであり、reflectionにあります。先生方はそれをなさったわけですから。

私どもも先生方のこの実践に勇気づけられながら、今後とも一緒に仕事をしていきたいと思っております。

本日は、おめでとうございます。



ICTに関わる論文の総評

坂元 昂先生

受賞された先生方、本当におめでとうございます。昨年3月11日の東日本大震災の状況から立ち上がろうとする日本の教育再興に対して、大変力強い応援隊となるご研究ばかりだと思ひながら私は論文を拝見いたしました。

ICT関係の論文は17編で、それを慎重に審査させていただいた結果、いま寺崎委員長からご紹介いただいた2編を推奨いたしまして、小学校1編、中学校1編が優秀賞の受賞となりました。

ご応募になった論文の傾向をとらえますと今、私はSTEMが振興しているということを感じました。STEMとは、Sはサイエンス、科学です。Tはテクノロジー、技術です。Eはエンジニアリング、工学です。Mはマスマティクス、算数です。

教育実践の研究は東日本大震災の前から行われていたと思いますが、その論文のまとめに大きな影響があったのではないかという印象を持ちました。

小学校で優秀賞を受賞されましたのは、秋田市立川尻小学校の田口隆先生の論文です。小学校ではご承知のように1、2年生の生活科で植物や自然を扱っています。3、4年生、そして5、6年生の理科として、充実した科学的な植物、生物等の理科教育、家庭科教育が進んでいきます。田口先生は低学年から高学年へと系統的な栽培活動が続けられないかと、表現力とい

う観点から植物栽培の指導を実践されました。イネやゴーヤ、ヘチマなど、多種類の植物を子どもたちが栽培する経験を指導されています。

また田口先生の学校では、「お米マイスターへの道」というような子どもを育てる指導を行っていらっしゃる。そこでは、いろいろな植物を比較しながら、1、2年生でまとめた栽培の実践や体験を3、4年生へとつなげて、5、6年生で完成という流れになっています。その過程のデータや、これまでのいろいろな植物に関するデータをまとめたり、特に秋田県でのいろいろな地元のデータをおまとめになりまして、データベースを作成させる。その時に「ふるさと先生」といって、地域のベテランの方のお知恵をいただきながら、すばらしい表をおまとめになっていらっしゃる。

それはどういう表かといいますと、縦軸に種子とか育苗・移植、栽培活動、植物を生活に生かす、栽培用具の使い方、横軸に1・2、3、4、5、6年生と、その年齢段階で獲得させる主な栽培技術のリストを作られて、よい種の見分け方、育苗や土づくりの仕方など、細かい評価点を立ち上げて、それぞれに対して10問ぐらいのテストを行い、点数を出して栽培教育に関してのいろいろなりテラシーに関する重要性を子どもたちに自動的に示すといった表を作成されています。そして、それをデータベースにして、次の年のイネの栽培過程の支援マニュアル等に

なる基礎的な資料としています。子どもたち自らが、1～6年生へと続く系統的な栽培活動を通して植物全体についての理解を深めており、ICTを活用した効果が表れた優れた論文だったと思います。

次に、中学校では長野市立柳町中学校の新井仁先生の論文が優秀賞を受賞されました。新井先生の論文は、長野県のスギ花粉の飛散量とスギ花粉の分散、発生量を比較対照され、次の年にスギ花粉がどのぐらいになるかを予測し、その予測に対する対応策を講じるという内容です。そのプロセスを通して先生ご自身の探求心や子どもたちの探求力を育てる研究としてすばらしい実践であると思います。

新井先生はパソコンではなくて、グラフ関数電卓を上手にお使いになってデータ処理と次の年度の予測を行っていらっしゃるようです。幅広いメディアが現場で使われ始めているという印象を持ちました。こうしたSTEMの傾向をもっと伸ばしていただき、日本の子どもたちが世界の中で優れた技術力を支える根幹になって活躍していただきたい。そのために、この賞を大いに役立てていただきたいと思います。

先ほどお話しましたSTEMを中心にして国力を上げて、世界の技術に貢献するよう、ご発展をお願いしたいと思います。

世界の情勢はと言いますと、私の印象では、いま世界の流れがSTEMのほうに集中していることと、メディアに関しては、先進国、先進学校ではハードウェア、ソフトウェアの普及がだいぶ行き渡ってきています。

日本から見えてうらやましいと思ったのは、そうした、先進国や先進学校ではいろいろな外部の人たちの助けや、地元の専門家がいっぱいいらっしゃるってサポートしてくれていることです。いわゆる支援員的なものですね。支援員としてサポートしていただければうれしいし、その手配もほしいし、規制なども緩和していただけると、学校としても効率的に機能するのではないかという印象が強いですね。韓国にしても、シ

ンガポールにしても、アメリカ、イギリス、最近はフランスもそうです。スペインや南米のチリなど、いろいろな国でそういう状況が見られます。

ただ、概して言うと東南アジア系、日本、中国、韓国を含めた国々は上から目線と言いますか、教師の指導の色彩が強い。いわゆる子どもへの一斉指導、日本での教科指導のようなやり方がICTの指導でも行われています。また、いま申し上げたようなヨーロッパの先進国では、課題は教師が与えても、調べるのは子ども目線で調べる。また、子どもが自分で課題を持ち込んで学習することも結構あるようです。そうした違いが、東南アジア系の国とヨーロッパの国々とで少しあるようです。

いずれにしても、ICT活用の指導技術向上のために先生方、一緒に頑張りましょう。本日は、おめでとうございます。



皆さん、おめでとうございます。先ほど寺崎先生がドナルド・ショーンのお話をされましたが、まったくその通りだと思っています。私も自分で大学の授業をやっていますのでつくづく思いますが、実践研究をするには極めて高い労力が必要になります。毎日、実践記録を残さないと論文としてまとめることはできませんので、そういう点で実践研究をされたことに対して、

敬意を表したいと思います。

私は、ICTの教育実践についてお話させていただきますが、通常、実践というところから出てくる知識はハウ・ツーが一般的に考えられているものではないかと思われまます。しかし、私はそうではなく、実践から得られる知識は本質的であると思っています。

例えば今回、中学校・優秀賞を受賞された新井仁先生の論文では、先ほどグラフ関数電卓のお話が出ましたが、新井先生は花粉と日照の関係をグラフにしたというところが見事であったわけです。ただこうした場合、コンピューターを使ったらいいのかということ、そうではなく、たぶん小さいグラフ関数電卓のほうがわかりやすいのだと思うのです。グラフを描くわけですから。つまり、このことは何を言っているかということ、メディアの使い方は適材適所だということ。メディアはすべて最先端の道具でなければならないということではなく、適材適所に使うべきであるということ。まさにこれはハウ・ツーではなく、本質的な知見です。そういうことを論文の中で提供されているのではないかと私は思います。

それから、小学校・優秀賞を受賞された田口隆先生の論文は、植物の栽培活動の教育実践ですが、私はおもしろいと思いました。どうしておもしろいのかと思いましたが、子どもはキュウリやゴーヤなど、いろいろなものの成長記録をデータベースに記録していきますが、そこでわかったこと、つまり、データをきちんと記録していけば子どもの気づきや発見があるということです。子どもは何と言ったかといいますと、「キュウリとゴーヤにはその成長に共通点がある」と言い始めたということです。そのことはおそらく本質的な知識で、ドナルド・ショーンはまさにそのことを言っているのではないかと私は思いました。

そうした実践によってキラリと光るものをみんなが共有していく。それがこの実践研究の使命だということを今日の講評をお聞きしながら、

私も勉強させていただきました。ありがとうございました。



受賞の先生方、おめでとうございます。論文の内容も表現もとてもいいものだったと思います。年々、内容のほうでは差がつかなくなり、審査のほうも困っております。ただ、私が一つだけ申し上げたいのは、いい実践だと思うけれども、そのよさが伝わってこない論文が結構あるということです。私は主催者の方に、教育賞は内容ですか、表現ですか、論文の形ですか、と聞きましたら、内容ですと言われました。たしかに教育賞ですから、内容がよくなければいけないけれども、いい内容であることを伝えることを大切にすることも大事だと思うのです。

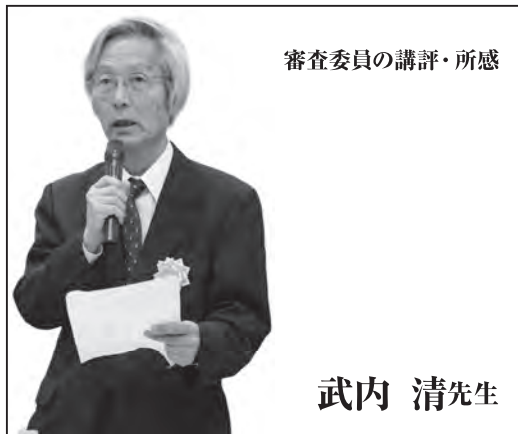
「東書教育賞」は教育論文賞ではないですから、論文の形はどうでもいいと考えられるかもしれませんが、読んでいて、もう少し、うまく表現してくれれば、もっとこちらにも伝わってくるものもあるし、いい論文になるだろうと思うようなものもあります。いい内容を相手にどうやって伝えるか。これは子どもに教える時も同じことだと思います。いいことだから、適当にしゃべっていれば、いいことが伝わる、事実が伝わるというものではなく、これはこういうことがいいのだ、こんないいことがあるだろうと、そこに子どもたちに感動を持たせるような

教育の表現方法もとても大事なことで、この教育賞についても同じことが言えると思います。

いいことをしているから何でも書けば、いいことをそこから見つけてくれるだろうという姿勢ではなく、いい論文は、そのよさ、いいことの感動が伝わってくるような書き方や表現方法を工夫してほしいと思います。

今日、この賞を受賞された先生方の論文は、そういう意味でも大変優れていたと思います。これから書かれる方にも、できれば感動が伝わる、よさが伝わる、そういう表現の仕方を考えていただきたいと思いますし、そうしたことが明日への教育実践にもつながると思います。

ぜひ、頑張ってくださいと思います。



審査委員の講評・所感

武内 清先生

受賞された先生方、おめでとうございます。今回、審査に初めてかかわらせていただきました。先生方の熱意と工夫のこもった教育実践をたくさん読ませていただき大変勉強になりました。これならば、日本の教育はもう大丈夫だと大変心強く思いました。

社会の少子化が進んで、子どもたちの学習意欲がなくなっていると言われていますが、先生方の工夫でここまでできるのであれば、本当に心強いと思いました。ただ、先生方は日本のトップクラスで、選ばれた方々ばかりですので、日本の平均とはいかないと思います。ぜひ、ほか

の先生方にも伝えていただき、「東書教育賞」を日本全国に広めてほしいと思いました。

私は教育社会学が専門なので、教育の社会的な側面と実証性という面で審査をさせていただきました。その面でも、とても優れたものばかりが選ばれていると思います。先生方は、教科の内容を一方的に教えるだけではなく、子ども同士のやりとりを取り入れたり、地域の人の協力を求めたりプレゼンを工夫されたりと、様々な実践の工夫があるのが印象的でした。

小学校・最優秀賞の関根先生の健康教育の実践でも、「E男君のかみかみソング」をいろいろな人の協力で率先して作ることが、健康教育の実践に貢献していることが読み取れました。中学校・特別賞の井上先生の大浜飛行場関連の学習では、見学だけではなく、当時の訓練生の教官の話や地域の人のお話を聞いたり、創作劇を作ったりと、いろいろな工夫がなされていました。第2の実証面でも、子どもたちへの効果のデータをきちんと取り、また実践の仮説の検証、実践の効果を測っているものが多数あり、感心しました。また、特に中学校・小山先生、小松先生、小学校・宇都宮先生の実証的な側面にはとても感心させられました。

一つだけ、仮説の検証という言葉がよく使われていますので一言申し上げます。擬似相関ということもあり、見かけ上の関係なので、その点だけは気をつけていただきたいと思います。教師がある新しい教育方法を一生懸命やると、子どもたちもやる気を出して、いい結果が出てきます。ただ、それが必ずしも、その教育方法の成果ではなく、教師の意気込みが伝わっただけということもあります。その検証を比較するグループを作ったり、結果に影響するほかの変数を統制したりする工夫も必要かと思います。とにかく教育の世界は信念や教育愛が先行し、それも大事ですが、それだけではなく、科学性や実証性も大事だということを強調しておきたいと思います。

これは寺崎先生のおっしゃった反省的实践や、

坂元先生のおっしゃったSTEMともつながることで、今回選ばれた先生方の実践はそういう熱意と同時に科学性、実証性も含まれているものばかりでしたので、こうした研究実践を日本全国に広めていっていただきたいと思います。

本当におめでとうございます。



審査委員の講評・所感

壺内 明先生

第27回目の「東書教育賞」を受賞された先生方、おめでとうございます。今、日本の学校教育は新しい時代を迎えています。教育基本法をはじめとして、教育に関するすべての関連法規が改正・改訂され、小学校では、昨年より新学習指導要領が全面実施されており、いよいよこの4月から中学校で全面実施されます。

今回受賞された先生方は、新学習指導要領の趣旨を十分踏まえて、子どもたちの視点に立って授業改善に努め、教育研究論文としてまとめていただきました。先生方の実践研究に共通することは、授業を通して、「基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得」させていること、問題解決をするために必要な「思考力・判断力・表現力の育成」を言語活動を重視しながら取り組んでいること、などが研究論文から読み取ることができます。私からは、中学校の部について感想を述べさせていただきます。

まず、最優秀賞を受賞されました岡山大学教育学部附属中学校の小山真二先生、おめでとう

ございます。先生は、「技術・家庭科（技術）」における問題解決能力の育成を目指した授業」というテーマで実践研究をされ、「ストロー橋製作実習」というものづくりの体験活動を通して問題解決の喜びや達成感を味わう授業を展開し、多くの成果を上げられました。チームで知恵を出し合い、「耐荷量」と「橋の軽量化」という相反する条件をクリアしながら、2回の競技会形式でストロー橋を完成させる授業実践に取り組みされました。先生の教育実践は、これからの社会をたくましく生きる子どもたちに最も必要とされる問題解決能力の育成を目指して実践されたところに、大きな教育的価値があります。子どもたちに、思考力や判断力を駆使しながらスモールステップで解決させようとしたすばらしい発想であります。将来、子どもたちが様々な難問に遭遇したとき、その解決方法をチームや自分の力で解明できるようになると確信しています。

次に、優秀賞を受賞されました小松香江先生、おめでとうございます。「自己表現活動に意欲的にとりくむ生徒の育成」というテーマで英語で日記を書かせることを通して、言語活動の充実を図り、自己表現活動の実践研究を進められました。授業での五つの表現活動の実践や家庭での英語による3行日記を継続して実施しながら取り組んだ創意工夫のある適時に富んだ好論文であります。「言語活動の充実」は、今回の教育内容の改善事項のトップに挙げられており、すべての教科等で実施しなければなりません。このことから考えますと、先生の実践研究は先駆的な研究といえます。今後、さらに継続研究されることを期待しております。

特別賞を受賞されました井上裕一先生、おめでとうございます。先生は、昨年、最優秀賞を受賞されています。今回は、「主体的に探究する地域教材の開発と協同的な学習活動の工夫」というテーマで、探求的な学習や協同的に取り組む態度を育てるための地域教材の開発や指導の工夫を重ねながら研究を進められました。先

生の地域教材開発への情熱と子どもたちに郷土を愛する心を育む姿勢に頭が下がる思いがしました。また、見学や戦争体験の講話などを通して、学年劇の創作及び発表へと学習活動を深めたことは、高く評価されています。ますますのご活躍を期待しています。

最後に、受賞された先生方の今後のご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。



受賞された先生方、おめでとうございます。私は坂元先生や赤堀先生とともに、ICTに関する論文を中心に読ませていただきました。ICTに関する論文では、今日ここに優秀賞のお二人の先生がいらっしゃいますが、先生方の実践論文が示してくださった特徴や共通するところで私がいちばん感動しているところは、子どもたちがお互いから学ぶというところです。学び方や教え方の変革がICTの力によってもたらされているところがうまくいっている、そういう好事例を記述していただいたのだらうと、とらえさせていただいております。

最近ですと、韓国などはデジタル教科書が進んでいるというようなお話があります。私は実際にそんなにたくさんの事例を見たわけはありませんが、私の知る限り25年ぐらい前の韓国の授業のやり方と今の授業を比べると、私から

見てほとんど変わっていない。例えば、私は理科が専門なので理科の授業を見ているわけですが、25年ぐらい前に韓国に行った時には、黒板の横に掛図がありまして、韓国語は通じませんが、やっていることはだいたい通じるのです。

「これは何つなぎ？」と先生が聞き、子どもが手を挙げて先生が指すと、「並列つなぎ」、「直列つなぎ」。「どっちが明るい？」、「こっちだ」など、そういうようにやっていることが日本人でも、韓国語がわからなくても何となくわかる。

それが現在は、黒板と黒板の間にきれいなモニターがあって、そこに例えば、動画が出てくる。子どもたちの目の前にはコンピューターが1台ずつあって、子どもたちはそこにわかったことを書き込んだりしていますが、先生はやはり、「この火山はどんな火山だ？」、「どういう特徴があるか？」と聞くと、子どもたちは「はい」と言って手を挙げて答えているので、簡単にいうと、一斉授業のスタイルは変わっていません。ひどく言えば、教え込んでいるのに近い感じだなという気がしています。

先ほど坂元先生がおっしゃっていた、アジア圏と欧米の学校の授業のスタイルの違いが、ICTが入ってきてもそんなに変わっていないというのが、韓国の例ではないかと思っています。

そういう中で、日本のいい点はICTが入ってきたことによって、先生が教えるというよりも友達から学ぶという要素が出てきたことです。

栽培の記録を取ったものが、次の年度の子どものためのマニュアルになっていく。またグラフ関数電卓、関数、会議など、いろいろやったものを友達のものも見ることによって、自分のものと比べて、友達から学んで自分のものを改善していくなど、教えてくれるのは必ずしも先生や教科書の中身ではなく、友達の考え方であったりするという点です。そうしたことができるのは、ICTという道具を効果的に使うことでできるという事例をご紹介してくださったのだと、私はとらえています。

実践を記述することが、先生方ご自身や、目の前の子どもたちのためになっていることは、寺崎先生が先ほどお話しされたように素晴らしいことですが、私どものように教員養成大学にいますと、これからの若い先生方にそのノウハウとといいますか、真髓を伝えていくような責任もあるわけです。そうすると、文字で書かれたものだけではなく、できるならば、これまでの先生方の記述していただいた実践がビデオで記録されているようでしたら、そのようなものも何らかの形で提供していただくと百聞は一見にしかずで、「なるほどな」という感じで、子どもが子どもから学んでいる様子がよくわかるのではないかと思います。記述は振り返る上で大変重要ですが、第三者に伝えるためにはビジュアルなものもとても効果がありますので、ICTの活用においても様々な形のご提案をいただくとありがたいと思っております。

本日は、おめでとうございました。



審査委員の講評・所感

三上裕三先生

第27回東書教育賞を受賞されました先生方に、心よりお祝い申し上げます。

私は、小学校部門を中心に感想を述べさせていただきます。

さて、今年度、小学校においては新学習指導要領が全面実施された年であり、当然のことですが、教科書も一新いたしました。東日本大震

災の影響で地域、学校によっては年度初めを様々な困難を抱えた中で迎えられたところもあったことと思います。

そのような中で、小学校の応募数が前年度と比べて増加していることは、先生方の研究意欲の高揚と実践的な研究が地道に積み重ねられているものと受け止めております。

教科・領域の応募数を見ますと、国語・社会・算数・理科の主要教科がいずれも伸びていることから、新学習指導要領の趣旨を生かした教育実践が熱心に行われていることがうかがえます。

まず、小学校の部で最優秀賞を受賞されました茨城県鹿嶋市立高松中学校の関根幸枝先生、おめでとうございます。先生は、昨年度まで在籍された小学校での実践をまとめられました。「健康は一生の財産！たくましい子どもを育てた健康教育の実践」と題するテーマで、養護教諭の立場で6年間の子どもの成長を見届け、中学校へ送り出すまでの実践記録をまとめられたものです。子どもたちに寄せる先生の深い教育愛と養護教諭として健康教育の実践に全力を注がれたその強い情熱と責任感に敬服いたします。

優秀賞を受賞されました宮崎県延岡市立延岡小学校の宇都宮浩先生は、「実感を伴った理解を深めるための理科指導の在り方」のテーマのもと、4、5、6年生の理科の実践をまとめられました。

先生は、「実感を伴った理解を深める」ために、問題解決的な学習、ノート指導、メディアの活用、保護者との連携に焦点を絞って実践されました。なかでも、保護者向けの「サイエンスニュース」を毎週発行し、学習内容に関連のある記事や理科読書の勧めなど、家庭においても親子で学ぶ機会を提供されたことは素晴らしいことだと思います。

次に北海道札幌市立白楊小学校の黒澤智美先生は、「自ら問題意識をもち、意欲的に学び合う子どもを育てる学習を目指して」と題して、小学校5、6年生の算数科の実践をまとめられ

ました。先生の実践には様々な工夫が見られ、それらを7つの授業改善の視点として設定し、高学年らしい学びの姿が追求されています。

「算数の時間が楽しく大好きだ。」「前は好きではなかったが、好きになった。」など、子どもの生の言葉を学級通信で保護者に知らせるなど、算数の授業と学校経営との関連を大事に指導された実践であるところに、私は大きな意味があると思います。

次に、特別賞を受賞された茨城県日立市教育研究所所長の大地斉先生は、昨年に続いての受賞です。おめでとうございます。先生は「こども発達相談センター」所長として教育現場、行政、医療機関等との連携を図りながら、センター開設のためのご苦勞をされました。今年度は、「だれにでもできる発達障害児の支援メソッドの実践」をテーマに研究実践を重ねられ、発達障害児の理解と支援に必要な「支援メソッド」を完成されました。例えば、身の回りの片づけができない、授業中歩き回る、友達とトラブルが多い低学年の子どもに対して、保護者も担任も困り果て、悩み抜いてセンターに相談に来た場合、誰にでもできる20段階の支援メソッドが系統的に研究され、子どもや保護者への対応・支援の方法がまとめられています。これは、発達障害児の指導・援助で困っている関係者の方々に大きな指針となり、具体的な指導の手がかりを提供する貴重な研究成果であると考えます。

来年度は新教育課程実施2年目を迎えます。基礎・基本の定着を確実に図り、教育の質をさらに高める教育の実践が求められます。

皆様のご活躍を祈念して感想といたします。

